

永井龍男
全集
九

講談社

雜文集Ⅰ

永井龍男全集 第九卷

昭和五十六年十二月二十日 第一刷発行

著 者 永井龍男

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二

郵便番号 一一二

電話 東京〇三)九四五一一一(大代表)

振替 東京八一三九三〇

定 価 四二〇〇円

装 幀 原 弘

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 島田製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

© Tatsuo Nagai 1981, Printed in Japan

ISBN4-06-119289-2

(文1)

目次

紅葉の前		52
東京の鶯		50
金屏風		48
いびきに就いて		40
カードの遊び		38
代書屋風の室		34
暖かい冬		31
箒星の頃		28
夜寒		25
蛞蝓日記		22
材料		17
東京の雪		13

雨	57
五錢銅貨	59
からみズム研究	63
天才の出現	73
短篇小説と貯金	76
翁	80
にわとりと牛	83
ものの芽	86
ねむいということ	88
道徳教育	91
水のあと	95
街中の釣り	111

正確な文章	113
五家争鳴	116
彼岸花のこと	121
十年一昔	124
孫と新興国	129
薔薇のとげ	132
相撲のマス	134
ひもの箱	137
小悪魔	140
伯父さん	143
十月の時計	146
鴉	149

さくらのころ		153
また、年寄りのこと		157
勝負事		161
復讐		164
芝刈り器		166
引越しの数		168
夜の食堂車		172
雪のあとさき		174
時間外れの酒		177
蚊帳		180
私の小説から		182
質屋について		186

赤とんぼ・蜂・鈴虫 190

名人上手 193

七草まで 195

パチンコ・プロ 198

数え日 201

独楽の紐 204

雪のメモ 207

合 唱 210

夏の月 212

脇役と端役 214

ネクタイの幅 218

初髪のこと 220

去年今年	222
立春まで	227
鯉の川	232
八十八夜	237
ある朝刊	242
英朋つりしのぶ	247
お山洗い	250
秋祭り	254
長火鉢のまわり	259
霜の朝	265
冬遠からじ	268
勲章の記	273

雪の正月		278
背中から		283
梅から桜		288
竹の子		294
梅雨明け		299
かまぐらの鴉		304
中国旬日		307
水さまざま		333
死霊・生霊		338
二百二十日		343
膝の猫		348
一里塚		353

冬至まで	紅　　白	四階の窓	風 ……	井戸の水	風　　車	去年の銀杏	身に沁む	夕ごころ	付け加える話 ……	冬木の鴉	花　十日
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
399	397	393	390	387	384	378	376	373	367	364	359

運と不運と		403
あとがき		433
解題		439

永井龍男全集

第九卷

東京の雪

——べえ独楽の記

歳暮の雪は少ししか降らない。一度降る迄がとても寒い。

すぐ思い出すのは「べえ独楽」遊びである。あんなに手先の冷たいものののに、日が短かくて学校から帰るともう夕日づいていて秋の末頃から流行り出して、三、四月までこの遊びは続いた。遊びと云ってもこれは実に真剣な博奕で、仲間仲間が親や先生の眼の届かない横丁や駄菓子屋の傍で賭場を張ったようなものなのだ。「べえ」が铸件で出来ている処から、賭ける気持が真剣にくるのだ。

辞書を引いて見ると「ばい（海蔵）海産右巻貝、肉は食用、殻はばい独楽に作り——」云々とあるが、此処から出て、我々のはべえ独楽、形だけは貝に似ているが金物で出来ている。この頃の子供達にもまだこの遊びは残っているが、使っているのは面を巴の模様で埋めた、「大阪べえ」と呼ぶ私達が場違い物と輕蔑していたものである。私達の使ったのはお猪口形のがらん洞で、内に金や銀や赤や青が塗ってあり、古くなって色がおちてこなければ好いべえとは云わなかった。

蜜柑箱なりバケツなりの上へ花簾の古いや薄縁りを敷いて霧を吹き、皺や折れ目のない適度の凹みを掬える、之をと、と云った。と、を囲んだ何人かが掛声諸共卷込んだ紐を一気に引っ離して、勝負が始まる。

と、この中で三つ四つと闘うべえが、跳出されれば負け、廻転力が止まった処を小突かれて、逆さかしまに伏せても負けである。くどくどと説明するのもおこがましいが、勝負用の熟語が沢山あって二人で勝負をする時には「にんがら」三人なら「さんがら」又「ひいふの」などと掛声がきまっております、「継ぎなし」とか「いっぱなし」とか勝負のルールをきめると「がぶ」と云つて唾を地に吐く。絶対にこれで約束を変更することが出来ない。大阪べえは闘つてもこつんこつんと勢いがなく、すぐ寿命が止るが、がらんべえは好い音で打突り合い廻転力も随分よくかかる。負ければ容赦なく相手のものにされて了う、新しいのが二箇で一銭、古いのは三箇一銭。勝つた子供は五箇一銭位で駄菓子屋へ売るのである。

輝きらや霜焼けの手を寒風にさらし唾で湿した紐を巻込んでとは、こへ打込む、みんな総毛立つたような顔色である。紺緋の羽織の襟まちの処へ隠しポケットを作つて、其処が重くふくらんでいる連中と一しよに、酒屋の小僧や八百屋の御用聞きも混っている。考えて見れば麻雀やダイスの面白さの比ではなかった。

押詰つて来れば松飾りが大売出しの氣勢を一層添えるし、どの店も品物を積み重ねて開けっ放しで客を待つ。温かそうなのは硝子戸越しに早くから明るい灯が見え、ちょきんちょきん鉄を使う床屋位のものである。こんな夕方からちらちら雪になるのだ。鈴鳴りの電車が青いスパークを絶えず明滅させて過ぎ、町の大きなカーブへ来ると、軌道のきしむ音を遠い横丁へ迄響かせる。

と、この廻りから一人去り二人去り、薄暗がりに残つたのが、ポケットからざらざらとべえを取出して小箱へ蔵うと、筒っぽへ手を引つ籠めて蝙蝠のように路地へ消える。豆腐屋がとんとんと何処かの暗い裏口で奴に切る音もするのである。売出しの楽隊が妙に遠くその癖はつきり聞えて来るのは、何はなくとも蒸し御飯と熱いお汁で温まり、そろそろ眠くなる頃である。山の手なり下町なりでおっとり育つた人の事は知らない、私のはみんな東京の裏店の子供の記憶である。

翌朝学校へ行くので二、三寸雪の積つた路地を出て行くと、塵芥箱の処までちょんちょんと犬の足跡が続き、その脇に昨日の儘のべえのとこが、これも雪に覆われてこんもり四角く置いてある。